

専門教育科目「生活」とキャリア教育との関係性

勝 田 み な

<摘 要>

平成 29 年 3 月に公示された学習指導要領の総則に「キャリア教育」の充実を図ることが明示された。これは、全教科に対してキャリア教育を関連させて指導する学校教育を進めていくことを示している。各教科の特質を生かして、キャリア教育の視点を取り入れていくことが、キャリア教育の充実につながっていくことになる。

専門教育科目「生活」（以下、「生活」とする）において、将来、小学校教諭（もしくは幼稚園教諭）として、学校教育の教科学習である生活科を指導していく上で、キャリア教育の視点からの内容を整理し、これからの「生活」の授業では、どのような工夫と手立てを行って授業を進めていくのかを検討した。小学校生活科は創設時から現在まで、「自立」をねらいにしてきた。今回の改訂で「自立し生活を豊かにしていく」という表現になったが、これは究極的な目標である。キャリア教育のねらいにも「自立」が出てくる。「生活」の授業の流れは、体験を取り入れながら学生同士、学生と教員の双方向のやりとりが通い合える内容で展開しているが、「生活」とキャリア教育との共通点を中心に、「生活」とキャリア教育との関係性を講じていく。

課題として、幼児期の教育との関連や接続を意識したスタートカリキュラムについて「生活」の中にもさらに積極的に取り組んでいくことと、小学校生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫を考えていくことが挙げられる。幼児期の教育から高等教育まで体系的にキャリア教育を進める点と関係性があると考えられるからである。

キーワード：小学校生活科 自立 キャリア教育

はじめに

平成 29 年 3 月文部科学省より告示された小学校学習指導要領（2018）の生活科は、3 度目の改訂となった。朝倉（2018）は、「社会や自然も大きく変貌し、子どもの実態も変容を続けている。教育に関する考え方や学校教育の仕組みなども変わっている」と生活科が誕生して 30 年ほど経過した点に着目した。平成 20 年改訂の学習指導要領（2008）では、活動や体験を一層重視するとともに、気付きの質を高めることについて充実を図り、その成果として言葉と体験を重視した点が反映された。前回の改訂の上に、特に思考力、判断力、表現力などが具体的になるように見直すこととし、小学校学習指導要領（平成 29 年公示）解説生活編（2018）によると、今回、目標の改善として「具体的な活動や体験を通じて、『身近な生活に関する見方・考え方』を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを明確にした」と挙げている。

生活科は教科学習として誕生してから、小学校第 1 学年及び第 2 学年における直接体験を重視した重要な教科として位置付けられている。子どもたちの生活圏を学習の対象の場として、直接かかわる活動や体験を重視し、具体的な活動や体験の中で様々な気付きを得て、自立への基礎を養うことをねらいにしてきた。中でも新設当時から「気付き」を大切にしてきた。「気付き」については、気付きの質を高める研究が広く行われてきたが、筆者も「自分自身への気付き」、「無自覚なものから自覚された気付き」などをテーマに研究を進め、気付くために気付くには、授業の中において学生同士の積極的な活動から体験を重ね、そのたびに気付いた点を言語等で表現し考えたり共有したりを繰り返してきた。その繰り返しの中から、個人レベルの気付きだけでなく、他者へも目を向けて、交流することが重要になってきた。気付くという内容が焦点化してくると、具体的な活動が見えてきて行動変容につながっていき、小学校生活科の究極的な目標である「自立し生活を豊かにしていく」ことに近づいていけるはずである。

小学校学習指導要領の第 1 章総則（2018）に、改めて「キャリア教育」の充実を図ることが明示された。第 1 章総則第 4 児童の発達の支援の中には、「児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」とあり、児童に学校で学ぶことと社会との接続を意識させ、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育み、キャリア発達を促すキャリア教育の充実を図ることを示している。キャリア教育の理念は学校教育に浸透してきているが、指導内容がはっきりと明確に伝わらないことが課題で、キャリア教育を効果的に行うためにも、各教科の特質に応じて必要な資質・能力の育成につなげていくことが重要である。

小学校生活科では、「身近な人々」という言葉が繰り返し出てくるが、キャリア教育においても集団生活への適応がまずスムーズにいくために、友だちと仲良く助け合っていく態度の育成を図ることが大切になっている。子どもたちにとっての身近な人とのかかわりを十分に味わわせるためにも、生活科とキャリア教育は当然関連が深いものであると言えよう。それは生活科の特質を

生かして、キャリア教育を関連させて指導していくような学校教育を進めていくことが提示されたからでもある。

1. 研究の目的

本研究では、筆者の授業である「生活」において、将来、小学校教諭（もしくは幼稚園教諭）として、学校教育の教科学習である生活科や幼児教育を指導していく上で、キャリア教育の視点からの内容を整理し、これからの「生活」の授業では、どのような工夫と手立てを行って授業を進めていくのかを検討した。「生活」の授業の流れは、体験を取り入れながら学生同士、学生と教員の双方向のやりとりが通い合える内容で展開しているが、「生活」とキャリア教育との共通点を中心に、「生活」とキャリア教育との関係性を講じていく。

2. 小学校生活科 ー自立し生活を豊かにしていくためにー

小学校生活科は、平成元年改訂小学校学習指導要領において新設された教科である。小学校学習指導要領解説生活編（2018）では、平成20年改訂について、「活動や体験を一層重視するとともに、気付きの質を高めること、幼児期の教育との連携を図ることなどについて充実を図った」と挙げており、新設当時から気付きを大切に、そのために活動や体験を繰り返すことにより気付きの質を高めていくことをめざしてきた。また、この改訂までは究極的な目標である「自立の基礎を養う」が記載されていた。

今回の生活科の教科目標は、「具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。(2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。(3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」と示された。

朝倉（2018）は、「具体的な活動や体験」について、「対象に直接働きかける学習活動であり、例えば、作ったり、探したり、育てたり、遊んだりすることである」と述べており、このような活動を楽しく感じたり、そこで気付いたりしたことを、言葉や歌、絵、劇などの方法によって表現していく。直接的なやり取りの中で、資質や能力が育成されて、伝える、伝わるのが充実していくようにすることが大切になってくる。

「見方・考え方」について朝倉（2018）は、「各教科等を学ぶ本質的な意義を示すものと考え

られる。また、生涯にわたり重要な働きをして、各教科等における学びと社会をつなぐものでもある」と述べ、物事や事象を捉える視点や考え方から各教科の特質を生かし、「よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする」と続けることができる」と続けている（表1）。

表1 生活科の見方・考え方（平成29年改訂小学校教育課程実践講座生活より引用）

【身近な生活に関わる見方・考え方】 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする	
見方	【身近な生活を捉える視点】 身近な生活における人々、社会及び自然などの対象と自分がどのように関わっているのかという視点
考え方	【自分の生活において思いや願いを実現していくという学習過程の中にある思考】 自分自身や自分の生活について考えることやそのための方法

これまでの教科目標には「自立の基礎を養う」と表記されていたが、今回からは「自立し生活を豊かにしていく」と明示された。「自立」とは従前の教科目標について解説されてきたように、学習上の自立、生活上の自立、精神的な自立である。互いに支え合い補い合いながら生活科の理念を受け継いだと言える。思いや願いを実現するために、未知のまだ経験したことのないものや失敗をしたりうまくできなかったことに挑戦したりしていくことは、自分自身の成長につながる。「自立し生活を豊かにしていく」ための資質・能力は、総合的に育成されていくと言える。

3. キャリア教育 一子どもの発達を支援するキャリア教育一

前述したように、小学校学習指導要領の第1章総則に、改めて「キャリア教育」の充実を図ることが明示された。長田（2017）は、「特定の教科等ではなく、教育課程全体に係るということである」と明示された意味を述べている。キャリア教育を進めていく上で、今までに指摘されていることは、① 次の学校段階への進学のみを見据えた指導ではないか、② これまでのあり方を前提に指導が行われているのではないか、③ 働くことの現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されているのではないか、という点であった。これらの指摘に対して長田（2017）は、「教育課程全体を通じて必要な資質・能力の育成を図っていく取組みが改めて求められている」と述べている。つまり、発達の段階を踏まえたキャリア教育の推進が再重要視されていることになる。学習指導要領では、キャリア教育を進めていく上で中核となる時間の明示が必要になり、総則には「特別活動を要としつつ」という表現が用いられたのである。

改めてキャリア教育について確認すると、中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011）によれば、「キャリア教育は、一人一人の社会的・

職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育である」としている。キャリア教育の基本的方向性のうち「幼児期の教育から高等教育まで体系的にキャリア教育を進めること。その中心として、基礎的・汎用的能力を確実に育成するとともに、社会・職業との関連を重視し、実践的・体験的な活動を充実すること」とあり、キャリア教育の方向性として、「発達の段階に応じ体系的に実施が必要であり、様々な教育活動を通じ、基礎的・汎用的能力を中心に育成することが必要」と示された。

「小学校キャリア教育の手引き」（2010）の中で、「低学年のキャリア発達課題 ① 小学校生活に適応する、② 身の回りの事象への関心を高める、③ 自分の好きなことを見つけて、のびのびと活動する」とある。①生活の発達を踏まえた例として、「返事やあいさつ、自分の気持ちを伝えること、時間や決まりを守ることなど基本的な生活習慣を身に付けることや、社会生活上のきまりを理解することなどは、この時期の最も大切な指導である」を挙げている。学校生活に慣れて友だちと仲良く助け合っていく態度の育成は、繰り返し指導していくことが大切になってくる。②身の回りの発達を踏まえた例として、「様々なものやこと、人々とのかかわりを広げながら、身近な人々の生活や働く人々に関心をもち、積極的にかかわる。自分の生活を支えている身の回りの人に感謝する」を挙げている。学習の対象や場を広げていくことが大切になり、身近な人々とかかわることの楽しさを十分に味わわせることが必要となる。③好きなことの発達を踏まえた例として、「自分の好きなことが言えたり、友だちのよさを見つけたりしていくことをはじめ、自分をかけがえのないものとして大切にしていこうとする気持ちをはぐくんでいく」を挙げている。具体的には、小学校において、身近な人から集団へと人々のかかわりを広げながら、皆のために働くことの意義を理解し、自分の役割を主体的に果たそうとする態度を育成することである。さまざまな体験活動の中でできることを増やして自信をもって活動していくことが大切になってくる。これらの発達を踏まえてキャリア教育は、意図的・計画的に活動を工夫し育成を図っていくことが重要である。

以上の点を念頭に置いて、キャリア教育の視点からの授業を考えてみる。各教科や学校生活を送る活動の中にキャリア教育の視点を取り入れていくことは、これまで行われていなかった内容を新たに加えていくということではなく、これまでに行われてきた学習や活動が基礎的・汎用的能力の育成につながっていることを明確にすることを、再確認していくことである。例として秋田市の小学校「キャリア教育の推進」（2017）では、どうなれば「キャリア教育」か、というテーマで教師の共通理解を図った。それは、「① 応用・活用ができる。② 将来に生かせること。③ 自立するための力となっていること」だった。多くの人とふれあうことで、その人たちの思いや願いに触れ、自身の考えにつなげていくことが重要であり、職業観・勤労観の基礎を学ぶことである。この小学校でのキャリア教育の指導目標は、「学ぶ意欲、豊かなかかわりと、知識・知恵の獲得」であり、キャリア教育の視点からも重要な学習の中身と考えられる。そして、今後の学び方、生活の仕方、考え方を育てることになる。

4. 専門教育科目「生活」とキャリア教育のかかわり 一実践からわかること一

(1) 平成 20 年度学習指導要領とキャリア教育

平成 20 年度の学習指導要領改訂(2008)において、生活科の各学年の目標(3)に、「身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めることを通して、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活することができるようにする」という項目を増やした。これは、直接的なかわりによって、自分の良さや可能性に気付き、一人一人の認識を深めることが重視されたことから目標に掲げられた。

キャリア教育の視点を生かすことは、教科の内容に即したキャリア教育を行うことにより、学習の広がりや自己の生き方に関する子どもたちの考えの深まりを促すねらいがある。このような学習を意図的に設定することは、人としてどのように生活するべきかを考えさせるためである。

学習指導要領生活科目標(3)とキャリア教育には、「意欲と自信をもって」という言葉が共通している。めざす点が一致していることで、筆者の担当する「生活」の授業にも「意欲と自信をもって」を意図的・計画的に取り入れて進めていった。また、人とのかわりが重要なポイントになるため、「生活」の授業では講義が中心であるものの、ペアやグループを毎時間作り、しかも毎時間メンバーを替えてどのようなタイプの人ともかわれることをめざし、体験を重視して進めてきた。将来、小学校や幼稚園等に就職をしようと思い、入学してきた学生には、授業の中において人とのかわりを積極的に取れるようにした。物事へは意欲を持って取り組み、小さな成功を体験することを繰り返し行うことによって、自信につながっていくことを、「生活」の活動や体験から気付かせるように心がけた。

(2) 授業実践例

平成 2X 年度「N 短期大学の学内探検」の実践(2017・2018)からキャリア教育とのかわりを述べていく。

「生活」の授業は 1 年生後期に開講される。幼稚園教諭二種免許状、小学校教諭二種免許状取得において必要な教科であり、学生全員がこの授業を受講することになる。学生には、ただ気付きを得ることだけに注視させるのではなく、将来、保育者(幼稚園教諭や保育士、保育教諭など保育に携わる者)や教育者として仕事に就くためにも、保育者や教育者の立場で体験活動に取り組めたかどうかという意図で実践を試みた。学内探検授業の目標を以下の通り挙げた。

- ① 学内探検を楽しみ、関心を持って見る、聴く、触れる、探すなど、直接働きかけて自分とのかわりを深め、自分にとっての居場所を見つける。(キャリア教育)
- ② グループのメンバーとのかかわりを積極的に行い、気持ちよく生活するためのきまりやマナーに気付く。(キャリア教育)
- ③ 子どもの立場で活動に取り組む側と教育者(保育者)の立場で活動に取り組む側と両方の視

点を持つ。

授業での「生活」は、生活科の目指すものを知らせ、実際に体験させることである。この目標からキャリア教育の視点では、① 挨拶や返事をする、② 友だちと助け合う、③ 身近で働く人々がわかり、興味・関心を持つ、④ 自分の好きな場所を見つける、などが考えられた。この視点の中で学生たちには②が重要であった。毎時間の授業でメンバーを替えていることと、学内探検のグループもランダムにメンバーを決めたことで、学内探検のコースを決めたり役割を決めたりする話し合いから、意欲的に取り組むグループと関心を示そうとしないグループに分かれた。関心を示さないグループへは個別指導が必要になり、目標を徹底し、将来教育者や保育者として人とかかわる仕事に就こうとしているのだから、学習の場でのコミュニケーションの取り方を学ぶ意味をしっかりと話した。気が合わない人とグループになったとしても、協力し、表情に出したり否定・攻撃したりをしないことは、「生活」の授業当初から繰り返し伝えていることである。

学内探検は、メンバーを替えて2回行った。1回目は学内を万遍なく回ったグループで収集した情報を、2回目にはお互いの情報を交換し合い、体験を交流し合うまとめ（発表）を考慮して進めた。小学校生活科目標(3)の「意欲と自信をもって」の意欲に関しては、1回目よりも2回目が増し、キャリア教育の視点①～④を生かした具体的な体験活動になった。

2回の学内探検で、新発見があったかどうかを質問した結果、学生の約90%が「あった」と回答した。入学して半年経ったが、いつも同じ仲間と同じ場所での行動範囲で過ごしているのも、もの探しや数を数える、働く人の様子を見るなどは、興味を持って意欲的に取り組める内容だった。

保育者（教育者）目線を持って体験したことによって、意図的・計画的に注意を促され、思考が刺激されて考えるきっかけとなった。学生の変容としては、働く人の様子では、清掃中の職員への気遣いが学生に見られ、挨拶と会話から、多くの人に支えられていること、働き方で特に清掃を丁寧に行っている様子を見て、自分たちはきれいに利用することなど、感謝の気持ちを表現していた。実際に授業の後、職員に謝意を表した学生も数人いた。また、多くの職員に対しては、自分たちには直接的にかかわりはなくても、大学生生活を支えていただいていることも理解することができた。気付きだけではないが、気付きの積み重ねによって、大学生生活を客観的に捉え直すことにつながった。

(3) 平成29年度学習指導要領改訂とキャリア教育

今回の改訂において各教科等の目標で新たに「見方・考え方」という言葉が使用されることになった（前述「1.自立し生活を豊かにするため」に参照）。具体的な活動を行う中で、身近な生活を自分とのかかわりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとするようになり、そこでは、「思考」や「表現」が一体的に繰り返し行われ、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が育成されることを示している。

キャリア教育の充実を図るには、各教科等の特質に応じて指導を行う必要がある。子どもたち

の発達の支援のためには、学ぶことと将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基礎となる資質・能力を身に付けていくことができるようにする。また、「基礎的・汎用的能力」と生活科との関連も重要なポイントになる。

実践例として、岡山県教育委員会義務教育課が作成した資料から「小学校生活への適応を促す」を紹介する。単元名は「なかよしいっぱい だいさくせん（第1学年）」である。実践とキャリア教育の関係では、「学校で働く人々について調べる活動を通して、たくさんの人々に支えられて生活していることに気付かせ、このことが、身の回りの様々な人々や仕事に目を向け、人とかかわる力を高めていく契機になっていく」としている。実践のポイントとして、繰り返しの指導、柔軟な展開、協力体制などが挙げられた。基礎的・汎用的能力では、人間関係形成・社会形成能力、課題対応能力に関連させて、キャリア教育の視点を意図的・計画的に取り入れて指導を進めていくことが大切になってくる。生活科の特質を生かしながら、キャリア教育を進めていくことは可能であると言えよう。キャリア教育の充実を図ることによって、将来とのつながりを意識し、自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができると考えられる。

5. 考察 ―今後の「生活」とキャリア教育を深めていく関係性―

本研究では、筆者の担当する「生活」の授業において、将来、小学校教諭（もしくは幼稚園教諭）として、学校教育の教科学習である生活科を指導していく上でキャリア教育の視点からの内容を整理し、これからの「生活」の授業では、どのような工夫と手立てを行って授業を進めていくのかを検討した。「生活」の授業の流れは、体験を取り入れながら学生同士、学生と教員の双方向のやりとりが通い合える内容で展開しているが、「生活」とキャリア教育との共通点を中心に、「生活」とキャリア教育との関係性について講じてみた。

今回の学習指導要領改訂でキャリア教育の充実が明記されたことを受けて、「生活」の教科の特質を生かした授業展開は可能であると考えた。キャリア教育というのは、何か特別なことを教えることではない。今までの教育の中で、普段の生活の中で、育むことができる内容である。「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011）の中では、幼児期の教育から体系的なキャリア教育を進めることが必要であり、その中心になるのが、「基礎的・汎用的能力」を子どもたちに確実に育成していくことが求められる。そのためには、実践的・体験的な活動を充実していくことが必要である。「基礎的・汎用的能力」は4つの能力（①「人間関係形成・社会形成能力」、②「自己理解・自己管理能力」、③「課題対応能力」、④「キャリアプランニング能力」）に整理される（表2）。それぞれが相互に関連・依存した関係にある。これらの能力は、すべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることは求めている。つまり、「基礎的・汎用的能力」は、学びの基礎的な部分であり、将来の職業や生き方につながっていくための必要な能力と言える。

表2 基礎的・汎用的能力の4つの能力（国立教育政策研究所）

1 人間関係形成・社会形成能力
多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力
2 自己理解・自己管理能力
自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今度の成長のために進んで学ぼうとする力
3 課題対応能力
仕事を進める上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し解決することができる力
4 キャリアプランニング能力
「働くこと」を担う意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

「基礎的・汎用的能力」の4つの能力を小学校1年生・2年生の生活科では、キャリア教育の視点のどの能力にあてはまるのか具体例を示してみた（表3）。生活科とキャリア教育が、いかに関係性があるのかが、授業内容のキャリア教育視点からも自然に読み取ることができる。

表3 生活科の授業における基礎的・汎用的能力の内容

① 人間関係形成・社会形成能力
・ 場に応じた話し方や声の大きさなどに気を付けて友だちとはなすことができるようにする。 ・ 静かに廊下歩行ができた児童や、職員室、保健室などできちんとあいさつができた児童をしっかり賞賛することで、マナーへの意識を高める。 ・ 挨拶や話すときのマナーに気を付けて、話を聞いたり質問したりできるようにする。
② 自己理解・自己管理能力
・ いろんな人と仲良くなるために進んで関わることでできた自分に気付くことができるようにする。
③ 課題対応能力
・ それぞれの教室にあるものを見学し、教室の「ひみつ」を考えさせたり、2年生に質問させたりして、学校にはいろいろなものがあることに気付かせる。
④ キャリアプランニング能力
・ 身近な公共施設等を支えてくれている人たちの存在に気付き、直接かかわり、親しみをもつことで、将来、社会の一員となることを理解する力を高めることができる。

生活科での、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力は、一つ一つの単元や授業などにおいて、総合的に育成されていく。表2や表3に示した内容は、生活科の教科目標でもある「具体的な活動や体験を通して、身近な生活にかかわる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくこと」に共通していると考えられる。

生活科は、「気付き」を大切にしているが、具体的な活動や体験を通して、自分自身についての気付きとして集団における自分の存在に気付き、延いては友だちの存在に気付くことも大切にしている。身近な人々、社会及び自然と直接かかわりあう中で、生活上必要な習慣や技能を身に付

けることをめざしている教科であり、これは、基礎的・汎用的能力の ① 人間関係形成・社会形成能力と ② 自己理解・自己管理能力に関係があることが明確である。

また、活動において、思考や表現などが一体的に行われたり繰り返されたりすることが大切である。自分自身や自分の生活について考え、言語や身体を使って表現することができるようになり、やがて確固としたものになってくる。人と交流することによって共有され、それがきっかけとして様々なことが関連付けられていく。例えば、比べたり分類したりすることによって、共通点や相違点、それぞれの関係や関連が確認されていく。また、生活科では、実生活や実社会とのかかわりを大切にしているので、学校や家庭、地域において、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりすることで、安定的な態度として養われるようにする。これは、基礎的・汎用的能力の ③ 課題対応能力と ④ キャリアプランニング能力に関連しており、教科目標の趣旨と基礎的・汎用的能力とは、相互に影響している点が多くあると考えられる。

一方、「生活」の授業において、「見方・考え方」と「基礎的・汎用的能力」を関連させてのキャリア教育の視点を、前述の学内探検の授業で取り入れるとしたら、以下のような手立てが考えられる（表 4）。

表 4 キャリア教育視点を取り入れた学内探検の授業

<p>【学内探検授業目標】</p> <p>① 学内探検を楽しみ、関心を持って見る、聴く、触れる、探すなど、直接働きかけて自分とのかかわりを深める。</p> <p>② グループのメンバーとのかかわりを積極的の行い、気持ちよく生活するためのきまりやマナーに気付く。</p>
<p>【見方・考え方】 思考・表現が繰り返し行われる</p> <p>① 身近な生活を自分とのかかわりで捉える。</p> <p>② よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする。</p>
<p>【キャリア教育の視点】</p> <p>① 人間関係形成・社会形成能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メンバーの意見を聞いて自分の考えを正確に伝え、メンバーと協力・協働することができるようにする。 <p>② 自己理解・自己管理能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分から積極的に行動し、自分の思考や感情に気付く。 <p>③ 課題対応能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内の各教室や施設、備品などを子どもの目線と先生の見線の両方から考えさせ、学内には数多くのもに気付くことができる。 <p>④ キャリアプランニング能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの学生生活を支えてくれている人たちの働きに触れ、将来の自分の仕事につなげられる。

これらの考え方から、生活科とキャリア教育は深い関連があり、「生活」という授業で、どの部分に焦点化しても、おのずとキャリア教育の指導として生きる力の部分につながってくる。普段、何気なく利用している施設であるが、学内探検で見つけてくる、数を調べるなどの工夫で着目するところも変わり、興味関心を持つものである。また、両者の目線（子ども目線と教育者・保育者目線）の観点で探検活動を行うと、ある教室の机や椅子を調べることなど、情報収集を適切に

取捨選択・活用しながら判断していくことにつなげていける。小さなことでも、目に見えずなかなか気付かないことでも、間接的に自分とつながっていることには変わりはない。内藤ら（2008）は、「人の営みがどこまでもつながっていることを考えた時、どこまで引き寄せ近づけるのかについては、しっかりと吟味する必要がある」と述べており、これは、キャリア教育と生活科が自立に向け必要な基盤になって示唆を与えている。学生には、「生活」を学びながらも、将来、社会で教える立場となることを理解させ、意欲を高めるような授業展開をしていくことが大切である。

児美川（2017）は、「各教科等における学びが、キャリア教育にもなる」と述べており、キャリア教育は教育課程をつなぐ有用な効果を持つといえよう。「主体的・対話的で深い学び」の考えからは、自分自身や自分の生活について考え、表現することにより、対象が意味づけられ価値づけられるとすれば、身近な人々、社会及び自然は自分にとって一層大切な存在になってくる。この傾向は、「深い学び」であり、この実現が求められている。

以上のことから、「生活」の授業の中にもキャリア教育の視点を取り入れることは、可能な範囲であると理解することができる。「生活」の授業の流れは、「保育園運動会への参加」、「学内探検」、「創作劇」、「ミニ先生」などを取り入れているが、どの内容もキャリア教育の視点を意図的・計画的に入れて指導することができる。これまでも、例えば前述した授業実践例（平成2X年度「N短期大学の学内探検」の実践）の中にもキャリア教育の視点を入れて指導して成果をあげることができた。

今後は学生が将来、先生としての役割のもとで指導する立場での見方と学生自身のキャリア形成のための見方と両方を意識した授業の工夫が必要になってくる。特に、「ミニ先生」の授業では、翌年行われる幼稚園教育実習での準備のきっかけとしたり、他の授業での学びをさらに深めたりする機会として、キャリア教育の視点を盛り込んだ指導案を立てていけるように指導を進めていく。さまざまな活動によって、小学校生活科をどのように指導していくかなど、体験をとおして身に付けていった。それらの学びが、学生自身の自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成していくことになっていくと確信している。

おわりに

小学校生活科は創設時から現在まで、「自立」をねらいにしてきた。今回の改訂では、「自立し生活を豊かにしていく」という表現になったが、これは究極的な目標である。キャリア教育のねらいにも「自立」が出てくる。すべての子どもに、自立して社会で生きていく基礎を育てることが、めざす教育になっているからである。生活科もキャリア教育も共通点が多くあるため関係性は強く、関連付けながら教育を実践していける点は、明らかであると言える。

「生活」の授業では、小学校教諭もしくは幼稚園教諭に将来、仕事に就く学生には、特に自分自身のキャリア形成も考えながら、一方で子どもたちの将来を考えていける力を付けるためにも、

教科の特質を生かしながら意図的にキャリア教育を進めていきたい。

課題として、幼児期の教育との関連や接続を意識したスタートカリキュラムについて「生活」の中にもさらに積極的に取り組んでいくことと、小学校生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫を考えていくことが挙げられる。幼児期の教育から高等教育まで体系的にキャリア教育を進める点と関係性があると考えられるからである。

【引用・参考文献】

- 秋田市立桜小学校(2014)「キャリア教育の推進」平成 25 年度課題研究推進校実践発表会
- 朝倉 淳(2018)『平成 29 年改訂 小学校教育課程実践講座 生活』ぎょうせい p.10,12,14-16,21-22,
- 岡山県教育委員会(2017)「キャリア教育の取組 ～実践事例～」 pp.12-13.16-17.40-41
- 長田 徹(2017)「新たな学習指導要領におけるキャリア教育」国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター pp.1-6
- 長田 徹(2017)「新学習指導要領におけるキャリア教育」国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター
- 勝田みな(2017)「人とかかわりを深める専門教育科目『生活』の授業のあり方 —『学内探検』の実践において無自覚なものから自覚された気付きへの模索—」名古屋経営短期大学『紀要』第 58 号 pp.21-40
- 勝田みな(2018)「専門教育科目『生活』における気付きの積み重ね —学内探検活動の目線を中心にして—」名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター『子ども学研究論集』第 10 号 pp.85-94
- 児美川孝一郎(2017)「キャリア教育は、どこでアクティブラーニングと出会うか?—これまでの点検から、新たな創造へ—」法政大学キャリアデザイン学部
- 渋谷一典(2017)「生活科改訂のポイントと指導の改善・充実」独立行政法人教職員支援機構
- 鈴木隆司(2018)『授業が楽しくなる 生活科教育法』一藝社 p.33,38-39,44-49
- 内藤博愛、朝倉淳、神山貴弥、須本良夫、樽谷秀幸(2008)「生活科におけるキャリア教育の構築Ⅱ」『広島大学学部・附属学校協働研究機構研究紀要』第 36 号 pp.211-219
- 内容解説資料(2015)『平成 27 年度用 小学校生活科教科書 せいかつ 内容解説資料』啓林館 p21
- 文部科学省(2008)『学習指導要領 (平成 20 年告示)』
- 文部科学省(2008)『学習指導要領解説 生活編』
- 文部科学省(2011)『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』
- 文部科学省(2018)『学習指導要領 (平成 29 年告示)』
- 文部科学省(2018)『学習指導要領解説 生活編』

(名古屋経営短期大学子ども学科 講師)